てんじんき　下

小松の天皇の御孫延喜の御門のいとこにて
左大弁公忠といふ人おはしけり延喜四年卯
月上旬乃頃にはかにくれてとをかといふにいきかへりて
おほくの事ありて正念にてありてほとろひ
て秋津宮にてまゐりけるせしよりかくて
日くれてなほきを申しさりけるあひだおと
ろきたてまつりしよりせしまつる妻子
春属をとりあつめてこれあそひけるにけき
あつりまうとくて御前にてゆゐけるあひだ

あさましくてつゐに延喜をこゆる菅原のお
改元ありきこにかれあこゝとほうきよりとや
はかりかて着し給へく見えきこさめ
おもろを給ひてたそろしさやゆきかくろん
ぬくろうとつとにいりもなくそおはしけれ
かれされやうて年号をあらためて延長とそ
申けるあれ時よ菅丞相清涼殿よ化現
て数輩よまみえしよしまうりむしの事なの
申されおりしもありける事いま上にほきこり

おそろしさ世にはいまさら延長八年六月廿六
日は清涼殿のひはしさもりうへしいと涼しちお
ちかりて内裏震動しそくちかりし希忠
為をとりやさてたちてれ右中弁希世朝臣
かほやさてそのまゝの紀家連ほのかなりむ
きんてたゝ入れ大納言清貫卿ゟ色のさうよ
火すえほとさてぬるまゝろひとたまれいとしやう
してあるひはうまうさまにあるひはやまにおもれ
さけぬ二千ぬあるひさこにしよを人八十余人卿

えどらやミ転生ありしハ此花ありかとをとゝゑて
事ハ天満大自在天神の十六万八千の眷属
の中に第三の使者火雷火気毒王のしわざ
なり此内日雷電ハ卒爾の事なれハ人ゝそく
一時に事をさらけあわひて御祈祷にも及
ばそかりしまゝハ毒気にあてられたまひて
玉体不豫にして治方にもまよひ給ひ
こそあさましけれ　さてハかゝりしおりから
されハ終に御位を第十一王子朱雀天皇に

ゆづり給ひてやがてその日御出家ありしか
けれハ十日をもまたたまはすしてつゐに
御年四十六にて崩御なりけれハ宮闕
鳳閣やミになりて月日のひかりもうすく
女院国母のなけきさらにもいはす後宮の
妃嬪まても袖をしほりてなけくもことはり揺
裾のさりけなるもおりふし御懐妊の
あひ別離のものかなしさいとゞもつれて
きこゆるにこそ志ゅみへのなかれしいかゝ

ずれ伊八はしくらへかるも

抑此日蔵上人と申人むかしの名をハ
道賢と申けるを金剛蔵王の示現にて日蔵と
あらたむる号を此聖人ハ承平四年卯月
十六日より金峯山の笙の岩屋にこもりて
おこなひけるほとにおなしき八月一日むまの
時に頓死して十三日をへておりしかるそのほと蘇
にてありしをうつゝともなくして金剛蔵王
あひたてまつりたてまつりて善巧方便
三界流転のありさま六道四生をみせんとして

にあたる一には寛平法皇の御命をそむきたて
まつりし二には讒奏をかまへて罪なき人
を流罪してありしと三には自界の王位をうばひ
事をおこして人間のなやみをなせし科
いくは三人のむかしよりつみて朕か苦報をうくるなりと
仰せありこの三人の苦根は御事まては(?)つくさやらんと
日蔵上人もつつしんて恐怖して政の悪業を
よろこひつゝしと仰ありて獄卒つかれてのきたり
ゆつりてさらに火炎のそこへかけいりたり

上人かくハかたり給へハ金剛童子の告給はく
うむちやうを見して六道をめくらハ迦葉仏の
のはあるさ婆を志らせんかためなりとそおほせら
れけれハ又上人南をさしたるかなたを見給へハ
はるかに見わたり給へハ海中に大なる嶋あり
山水木立仏閣林苑のありさま西方浄土を
かくやとそおほゆる玉のつらなる甍かゝやく
白銀瑠璃をちりはめたる楼のつくり眩曜として三丈
の月をてらせりそれ中間ハ方八町のそあり

さてそのかのうへに七重の七宝の蓮華あり
このうへに八角の宝塔あり一々の戸やうこん
たへなるもと仏舎利 そのかうたいまし
妙法蓮華経金字の玉軸なるありひらりた
りひよかくやさて天部のまんたらあさ座り
けり

さればそのかくいけるに又楼閣ありこれは
趙もきりさまこそ閻浮提日本国にては
菅丞相と申この世界にハ太政威徳天と申
たとき人の住所なりとぞ申けるそれに
ありさまをみるほどに天童一人あゆみい
て金札とひとつもちきたるさゝげあけ
ふうよ菅丞相玉のふうに口をとく事たく
ゆしけるおほきれ夫ハ野馬台国せん
宿客清浄持律の上人なりけるかまへ

しかるのちみかどへ六十六かこく
といひして蒼海にうかやかおもひしめを
御法龍宮城の国神めいりを在りる事であと
とたまはりしつかのあひくさまつりをかくむ
あくしまてよ十六万八千の眷属ありなか
あまりにて在しもまいかいとかさしかにと
その難をのかれてんとおもいて毘沙天帝釈天と
ねかへりとそくへいでまいらせり

上人十三日といへてよみかへり給ひけり。冥途にての
事ともくはしく申されけれは、いよいよ
おそれあへるをつよく御神をあかめきこゆへく
さそはかりかかりしほとに天暦元年
七月三日に右京のある人のむすめあやこと
いひけるもの託宣して、いはく我昔のむかし右近
の馬場にあそひし事をわすれす、みやこ
のほとりの閑勝の地の中には、いとよくものおもはれ
しこそあれ、其事は就中よりたまさまて公の中ま

天徳十四年に修造事おはりにしそのかみ右
ほとりにとあつまのくまの人ゟしたかふの男七
歳たるものに託宣して、いくたひかをこれ
興りをねそう勝しけるをへおりふ事
ありけるかあしものは杖突の今利いとう
ものなかにつ細かりしは老松富部まて
称のりさまあり離家に今月に諸
謝してあそひし人は伴のなかりしも
未来とこそおもへやれ託宣ありけり

一言もあやまらて、かきしるして右近の馬場の
朝日寺の僧よ最珍志てらう天暦元年ら
この所にやしろをつくりあゆみをはこふ
貴賤上下道俗男女とこらとつくるを
いとなむや天徳ニ年にいたりて村上の
八月一日沖祭をとりおこなひつかまつりしかは
ほとよ円融院の御時貞元二年より天元五年
よつとせまて六ケ年のあひたに内裏焼亡
三ケ度なり作りいまいまたまたく

ゆきとそやけつ内裏をつくりてまゐらせられ
番匠とも南殿のうら板をゆきころよ昨日か
またいたすまし秋のはふうたと一首し
くいてそありけり

つくるとも又もやけなんすかはらや
むねのいたまのあはぬかきりは

かやうにそくいありける一条の御宇にはすり
おそろしきゆへに菅丞相の御廟安楽寺へ
一階をくはへて正二位従一位官太政大臣と贈官

さてこそ贈位の勅使は菅原幹正とかや
正暦四年八月十九日大宰府に下着して
安楽寺へ参詣して宣旨を机のうへにさゝけ
て再拝してよみをあけておさめ奉りける時
御廟のうちよりあらたに詩一ありて詩文あざやかに
てかゝやきそありけり

忽驚朝使排荊棘　官品高加拝感成
雖悦仁恩覃邃窟　但羞存没左遷名

女房たちの中にいひてしかりけるとかや聞て
せて仁俊北野に参籠してかやうにそよみける
うけれ

あはれとも神々ならば思ふらん
人こそ人のみちをたつとも

かくよみけるに女房くるまよりいでゝ
さらにまかせて錫杖をもちて目を見かへ
らして仁俊が発釈をかしらにいたゝきて
たかいなる所にありさぬるやとて口ばしりて

くるひまはりければ小野より
仁俊をよびてこの女房をさしむけゝれ
ばおはしましけるに赤はだかにて侍の
きはにはしりよりてなかなか是ゐんに
院御感のあまりにようとをすゝめくさ
たびけるめでたかりける

厳重あらたなる事どもおほく侍りける
後三条院の御時延久二年九月の比仁和寺
の池上寺に金剛を僧ありき年ごろに

てハ今生後生のねかひをもかなへ給へとて
とおほせける小野の小町やうにしたかひて
きりゆうのさはかせんにかへりさかへさせ
て父母のためにきやうをそしけるほとに
生前して発心他念なくつきぬやうをとけ
たりけり

天慶九年あふみのくにひらの宮にて祢
宜神良種か子是良か子童七歳なりけり
に託宣ありて我物の具をはこゝにまもりて
ちうのよそひけり仏舎利玉帯銀造
の太刀尺の鏡老松富部とて二人従者あり
笏をは老松にもたせ舎利をは富部にもたせ
てつくしよりのほりしなり我にそひてこそきたれ
なりこの二人ハ不調のものにてありけるゆゑ
まつそのものゝぬすみたる者をとられ老松して

粘将殺縁帰中鳥頭脱若悦攻家こゑと
禰きんれうもうらいうまつ揺しかうむとかく
こうすへ八万めすまり

十無益和哥

一ツ人よむまれゆくつきもなく後くと
十ツ人まてハむやくなりけり
二ツたくはへ川あれぬりときてよれハ
ハまんさうしてむ益くなりけり
三ツそくりさけとの母よさかりなりけりよ
うるさひとそむやくなりけれ
四ツたゝたくかりぬるとこそく時ハ
なりつきちんもむ益くなりけり

五かいよくかくさてそもつ人あらで
よれいまいりハむやくなりけり
六ぢやくとほとけにまいらせう
ようきんをねハむやくなりけり
七かむハ寺まいりハよおねがひのこと
おかみまいりこそむやくなりけれ
八まいハうちこくのありときくされハ
浄土住川ハむやくなりけり
九ほんと寺ほしむかうて将(せ)

称川南川をねハむやくなりけり
十せんのくるまをつくしハ弥の世よ
ミやうかこの世ハむやくなりけり